

サツマイモ事典刊行の経緯と改善課題

(財) いも類振興会 理事長 狩谷 昭男

はじめに

「サツマイモ事典」は2010年1月26日、(財) いも類振興会の企画編集により発行され、(株) 全国農村教育協会から発売されている*。

本事典は、2年半を要して完成した。この間、小林仁企画編集委員長をはじめ企画編集委員7名、企画編集協力者2名、執筆者81名のほか、発売元の元村廣司出版部長からご支援をいただいた。ここに深くお礼申し上げたい。

(財) いも類振興会は、2010年10月で創立60周年を迎える。「サツマイモ事典」の刊行は、この記念事業の一環として企画したものであり、その刊行が叶い喜びを感じている。

事典の刊行に当たり企画編集の目的・経緯を紹介し、併せて、将来の改訂版等に備え留意すべき課題について、取りまとめをしておきたい。

企画編集の経緯

当振興会は、サツマイモ、ジャガイモなどいも類の生産振興と消費拡大を主な目的とし、事業活動を進めている。2005年11月、筆者が理事長に就任して感じたことの一つに、サツマイモ、ジャガイモに関し、その全体を体系的、理論的に解説した書物が無いことであった。



そこで、サツマイモとジャガイモ別に、関係のある事項・用語を体系的に整理し、客観的視点からの解説書の必要性を感じ、出版の構想を練った。筆者は、日本農業普及学会から2005年9月に「農業普及事典」を刊行した際、事典企画編集委員の代表幹事を務めた。その経験も活かして、サツマイモ事典の構想を描いていった。

事典の企画編集に際して、2つの課題があった。一つは、サツマイモとジャガイモのうち、どちらを先に刊行するかであったが、サツマイモ事典を先行させた。その理由は、本振興会発足の礎石となった(財) 諸類会館が、1950(昭和25)年にサツマイモのいも粉業者からの寄附金等によって設立されたこと。更に、近年における国民のサツマ

イモへの関心の高まりなども考慮し判断した。

二つは、企画編集委員や執筆者からの協力が得られるかであった。2007年7月初旬、サツマイモの学識者である小林仁氏に、事典の企画構想を説明し協力をお願いした。8月によりやく快諾を得た。

これによって、企画編集委員会は、小林仁（元農林水産省農業研究センター所長・企画編集委員長）、小巻克巳（農研機構総合企画調整部長・企画編集副委員長）、井上浩（日本いも類研究会会長）、熊谷亨（農研機構作物研究所食用サツマイモサブチーム長）、中谷誠（国際農林水産業研究センター企画調整部長）、根岸由紀子（女子栄養大学准教授）、狩谷昭男（いも類振興会理事長）の7名で構成し、企画編集事務局はいも類振興会が担った。刊行までの主な経緯は、次のとおりである。

- (1)企画編集委員会（以下「委員会」という。）は、2007年9月14日に第1回委員会をスタートさせ、全部で9回開催した。また、企画編集委員会幹事会（以下「幹事会」という。）も5回開催した。
- (2)委員会では、企画編集の目的と基本方針、事典の構成、収録事項・用語、執筆者の人選、原稿執筆要領について、第2回（10月19日）、第3回（12月12日）の委員会で検討した。第4回（2008年2月1日）の委員会では、企画編集の目的と基本方針、原稿執筆要領を決定した。
- (3)第1回幹事会（4月10日）での検討を経て、第5回（4月30日）の委員会で事典の構成、収録事項・用語、執筆者を決定した。
- (4)第2回幹事会（7月24日）で、事典の構

成、関連用語の微調整を行い、事典原稿の執筆依頼についての了解を得た。執筆依頼は7月28日（一部は8月25日）に行い、原稿提出期限は11月30日とした。

- (5)第3回（9月8日）、第4回（2009年2月10日）の幹事会のほか、第6回（2月18日）の委員会で、事典用字・用語の統一表、原稿内容の調整方針を検討した。調整を要した主な事項は、原稿内容の重複是正、引用・参考文献の表示統一及び掲載内容の厳選、解説原稿字数の適正化、原稿内容の難易度調整、英文表記の的確性、原稿内容の表現統一であり、それらの対処方針を確認した。
- (6)2009年3月末までに原稿の提出が終了し、順次、原稿内容の事実確認、加除・修正に入った。第7回（7月7日）の委員会で、事典全体の内容調整を行った。主な調整事項は、口絵のカラー写真12頁の編集方針、サツマイモの文献・資料の加除・修正の方針、索引に掲載する事項・用語の選定基準と調整方針であった。
- (7)第8回（10月27日）の委員会で、事典内容の最終調整を行った。第5回（11月10日）の幹事会で、校正及び索引の調整を行った。以降、細部の校正を続け2010年1月18日に校了した。第9回（2月9日）の委員会では、総括的な反省、改善点を検討し、その任務を終えた。

企画編集の目的と基本方針

(1) 目的

サツマイモの生産から消費、文化を含む全体像に関し、体系化、理論化されたものは、これまでなかった。このため、来歴、生産、流通・加工、消費、文化に関する事

項・用語を客観的に解説した「サツマイモ事典」を刊行することとした。

刊行の目的は、サツマイモの振興を図るため、生産者、流通・加工業者、研究・指導者にサツマイモに対する関心と理解を深める一助とするほか、広く学生、消費者にもサツマイモについて全てが分かる入門書的な役割を果たすことを狙った。

(2) 基本方針

企画編集の基本方針は、その目的に即して次のとおりとした。

1) 本事典の利用対象者は、サツマイモに直接又は間接的に従事している者、研究・指導者、小中学校・高校の教員を主体に、広く学生、消費者も視野においた。したがって、極力、平易な表現に努め、サツマイモへの理解が深まるよう配慮して編集に当たった。

2) 事典の構成、収録事項・内容については、サツマイモの生産、流通・加工、消費のほか、来歴、文化、諸外国の生産状況、文献・資料についても組み入れることとした。そして、基本的で使用頻度の高い重要な事項・用語については、基礎的な解説を重視し、必要に応じて専門的な解説も加えた。

3) 事項・用語の解説に当たっては、客観的・具体的な表現となるよう留意し、簡潔な文章取りまとめに努め、必要に応じて引用文献を明記した。また、専門的な主要な事項・用語については、英文表記を行った。

事典の構成と狙い

(1) 基本的な視点、考え方

1) 事典の構成については、サツマイモ

全般について広く捉え、客観性を有した理解し易い総合事典とすることとした。また、各章の取りまとめに当たって、本事典はサツマイモの入門書としての役割も有することに留意し、各章、場合によっては各節の前段でその章の内容を総論的に概説し、後段では各論的に事項・用語を解説した。

2) 収録した927の事項・用語は、基本的かつ緊要度の高いと判断されるものを優先し、選定した。

3) 事項・用語の配列順序については、内容の理解が深まるよう一定の流れに沿った配列に努めた。さらに、同じ領域、性格のものをグループ化するなどの工夫を加えた。

(2) 事典の構成

事典は、7章と26節から構成されている。

口絵 カラー写真12頁（品種、栽培、病害虫、料理）

I 章 サツマイモの起源と伝播

1 節 分類・起源 2 節 伝播

II 章 サツマイモの特性

1 節 形態・生理・生態 2 節 遺伝・育種 3 節 いもの成分 4 節 機能性

III 章 サツマイモの生産と普及

1 節 品種 2 節 栽培・貯蔵 3 節 病害虫・生理障害 4 節 生産量と産地形成

IV 章 サツマイモの流通・加工・利用

1 節 用途別消費動向 2 節 植物防疫法 3 節 輸出入 4 節 行政施策

V 章 サツマイモの食べ方

1 節 調理法 2 節 料理 3 節 伝統的いも菓子 4 節 いも焼酎 5 節 焼きいもの移り変わり 6 節 海外の料理

VI 章 サツマイモをめぐる文化

1 節 呼び名 2 節 サツマイモ資料館
3 節 団体・同好会・研究会 4 節 いも
祭り 5 節 本の中のサツマイモ 6 節
トピックス

VII 章 世界のサツマイモ事情
サツマイモの文献・資料

主な改善課題

振り返ってみると反省点も多い。主な改善課題は下記のとおりであり、改訂時に活かしたい。

- (1)当初、高校卒業程度の学力を有すれば事典内容が理解できるように、表現は極力、平易で分かり易いものにする方針であった。しかし結果的には、かなり専門的な難しい内容を含むものとなった。特に、Ⅱ章 サツマイモの特性、Ⅲ章 サツマイモの生産と普及の一部では、事項・用語の性格上やむを得ない面があったとはいえ専門的な解説がみられる。ただ、この点に関しては、引用文献なども付し、内容の客観性を重視した編集方針からみれば、やむを得なかったともいえる。
- (2)解説内容の充実度合いをみると、Ⅰ章 サツマイモの起源と伝播、Ⅱ章 サツマイモの特性、Ⅲ章 サツマイモの生産と普及については、かなり体系的かつ専門的に取りまとめられている。反面、Ⅳ章 サツマイモの流通・加工・利用、Ⅴ章 サツマイモの食べ方については、節の構成、解説すべき事項・用語数の充実、解説内容などを含めて改善の余地が残った。
- (3)執筆者は、総勢81名であった。故に、予め原稿執筆要領等を示したにも拘わらず、表現や解説内容に濃淡や不統一、重

複がみられ、その調整に労力を要した。したがって、今後、執筆者数を絞り込んで編集に当たる必要がある。

- (4)事典の体裁については、活字が小さく、事項毎の追い込みがきつく、読みづらい面もみられる。したがって、活字をやや大きくし、事項毎に一定の間隔も確保するなど、紙面構成の工夫が必要である。

編集余談

編集過程での余談を、記しておきたい。

事典の名称

事典の名称は、筆者の原案では「甘しょ事典」であった。農水省の公用語は現在「かんしょ」であるが、試験研究機関の農研機構では「サツマイモ」である。筆者が農水省に在職していた1970～1973年当時は「甘しょ」であったので、「甘しょ事典」という名称が浮かんた。サツマイモの呼び名は様々である。企画編集委員会の結論は、現在、マスコミや教科書で使用されている呼び名の多くが「サツマイモ」であり、事典の名称もこれに倣った。なお、事典の英名「Encyclopedia of Sweetpotato」は、小林仁氏の命名による。

口絵と参考文献・資料の重視

分かり易い内容の事典を目指し「口絵」では、品種などのカラー写真の充実に努めた。口絵の写真提供者は、品種・熊谷亨氏、料理・根岸由紀子氏であり、栽培・病虫害は各執筆者からの提供によった。

また、巻末の「参考文献・資料」は、過去のサツマイモに関する主要な文献・資料を客観的な視点から点検のうえ集約した。今後、サツマイモを研究される者

等の道標になれば幸いだ。

事項・用語の英文表記

専門性を有する主要な事項・用語は、英文表記も行った。論文作成や国際交流などの参考となればよい。英文表記の妥当性については、語学に堪能な小林仁、小巻克巳、中谷誠、元村廣司の各氏が多面的に検討し、適切な表現とした。

焼きいもor焼き芋？

用語表現の統一に関しても、議論が多かった。その一つが“焼きいも”であろう。焼きいもについては、焼きイモ、焼(き)芋などの表現がある。

明治元年から日露戦争(明治38年)までを描いた人気小説、司馬遼太郎の「坂の上の雲」でも、当時人気があった焼きいもの表現が3ヵ所出てくる。文春文庫(全八巻)の一卷180頁「焼きいも」、同294頁「焼芋」、二巻286頁「芋が焼きあがってくる」である。名手、司馬遼太郎氏にして、焼きいもの表現が定まっていない。

芋(いも)は、サツマイモが日本に伝播する以前の縄文時代中期から日本にあった里芋(里いも、サトイモ)を指すといわれており、サツマイモ事典ではこの史実を重視し、里いもと一線を画す意味で焼(き)芋を採用せず、“焼きいも”の表現に統一した。

いも談義

いも類振興会の事務所は、赤坂の氷川神社に近い勝海舟邸跡地の一角に建つ古いマンションの一室である。企画編集会議は、外部の会議室を一切借用せず毎回午後1時に、この狭い事務所で開催した。会議を終えた事務所内で、いも焼酎を片手に2時間程度“いも談義”に花が咲いた。

小林仁氏、井上浩氏などのサツマイモにまつわる古今東西の様々な話は、大変興味深い内容で役立った。企画編集委員全員が、和やかな雰囲気の中で元気をいただく時間を共有できた。この“いも談義”が、よい意味でサツマイモ事典の編集に活かされたに違いない。

結びに

本事典の作成には、多くの日数と細心の注意を要した。編集作業は大変であったが、終えてみれば新事典を生み出す幸せな時間を与えていただいたと受け止め、感謝の気持ちで一杯である。

「サツマイモ事典」は本年2月からの発売以降、徐々に購読部数を伸ばしている。本事典が読者から高い評価をいただき、活用されることを願ってやまない。それによって、サツマイモに対する関心と理解が一段と深まり、将来、生産の振興と消費の拡大にも結びついていくに違いない。

結びに、本事典を一読された皆様から忌憚のない感想と、改訂に向けての改善意見・提案をお寄せいただきたい。そのことによって、将来の改訂版「サツマイモ事典」は勿論のこと、姉妹編として平成22～23年度の2ヵ年で出版を計画している「ジャガイモ事典」の企画編集にも役立つと考えている。

*サツマイモ事典

B5判、352頁、定価：4,800円＋税5%

発売元：(株)全国農村教育協会

〒110-0016 東京都台東区東1-26-6

電話 03-3839-9160

FAX 03-3833-1665